

わたしの使命

|       |                  |
|-------|------------------|
| 奨励    | 岩河 敏宏【いわかわ・としひろ】 |
| 奨励者紹介 | 日本キリスト教団南大阪教会牧師  |

ヤコブはベエル・シェバを立てハランへ向かった。とある場所に來たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。見よ、主が傍らに立って言われた。

「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」

ヤコブは眠りから覚めて言った。

「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」

そして、恐れおののいて言った。

「ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。」

ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立て、先端に油を注いで、その場所をベテル（神の家）と名付けた。ちなみに、その町の名はかつてルズと呼ばれていた。

ヤコブはまた、誓願を立てて言った。

「神がわたしと共におられ、わたしが歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、わたしが記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます。」

（創世記 28章10—22節）

人間の本質への問い

ヤコブは家族と共に住んでいたベエル・シェバを、一人追われることになり孤独となった。その根本的な原因は、双子の兄であるエサウから長子の権利（祝福・幸福）を自分の計略で得ようとした行為にあった。ヤコブの利己的な行動は調和を乱し、結果として父イサクや兄エサウから強い反感を招いてしまい共同生活することが困難となり、すべてを捨てて一人旅立つことになる。これまでヤコブがいたベエル・シェバという場所は、祖父・アブラハムや父・イサクが、異邦人（ペリシテ人）との間で井戸をめぐる争いが起きた際に、神の守りと導きを得て難を回避することができ、そのことを感謝して礼拝した、記念すべき場所である。だとしたならば、ベエル・シェバとは単に物理的な地名ということではなく、他民族との和解（共存・調和）の場であると同時に、神を礼拝する場所ということになる（創世記21章30—34節、26章15—25節）。またハランは、アブラハムが神の招きに応え、神にすべてを委ねるという一大決心のもと、一族を連れて歩み出した起点である（12章4節）。ベエル・シェバを立ちハランに向かうという記述は、すべてを自らの思惑で差配しようとする時（神の不在）、調和や秩序を崩してしまい、神を礼拝する場所に留まることができない、ということの意味する。しかしそのヤコブが向かう先は、アブラハムがすべてを神に委ねて立ったハランであった（神の守りと祝福）。

祖父や父が神を礼拝した場所を離れ民族の起点（信仰のルーツ）に自らが立ち返った時、神が初めてヤコブに現れ、彼にも守りと祝福を約束してくださった。この展開には、人間の本質への問いが秘められている。自力で幸福を得ようと目前のことに一喜一憂するわたしたちに対し、真の幸福は神が備えられ必ずそこまで共にいて導いてくださる。また、その約束を果たすまで神は決して見捨てない、という人に対する想いの強さが人生の礎となっている。神は、個々に固有の人生（生きる意味）を用意されているが、あなたは神の問い（眼差し）に気付いているだろうか。

わたしの使命

これまでのヤコブは、長子の権利を得るという目的の達成のために強引な手段でことを進め、人を欺くという罪を犯してしまった。それは、利己的な態度であり他者との共生を崩すことで、神なき世界を象徴している。これまでのヤコブの言動について、何かを始める前に主への祈りが記されていないことから明らかだ。しかし、そのようなヤコブ（わたしたち）に対して、神の方から近づいてくださり祝福を約束される。ヤコブはこの不思議な体験によって、初めて神の本質を知ることになる。ヤコブはこれまで主体的に神を求めることはなく、「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった」と告白している（28章16節）。その彼が、神を恐れ石を記念碑として立て（確立する）、神の家とした。ヤコブがそうであったように、わたしたちもこれまでの人生を振り返る時、生まれた時点から主体的に神を求める歩みをしてきたのではない。神の存在を意識するようになった出来事や環境が備えられていたからこそ、わたしたちは今このようにして共に礼拝をささげることができるのだ。

人生という荒波のなかで、自分の思い描く針路を進もうと悪戦苦闘し、時に弱り傷つき挫折し、軌道修正を余儀なくされることさえある。将来に明るい展望を見いだせない時に、主は「あなたと共にいる。あなたを守り、決して見捨てない」と言われる。だとしたならば、神の存在を知らされ、自らの人生に対しそれぞれに問いかけられているわたしの使命とは何であろうか。

創世記29章以下に記されているのは、伯父ラバンのもとでの厳しい生活であった。しかしヤコブは神との約束を胸に秘め、忍耐し、時の熟すのを待つことで成長を遂げる様子が描かれている。わたしも、厳しい現実のなかであってこのようにありたいと思う。ここにおられる一人ひとりが、神の導きのなかで自分にしかできない使命を全うしていただきたいと切に願います。